宗像

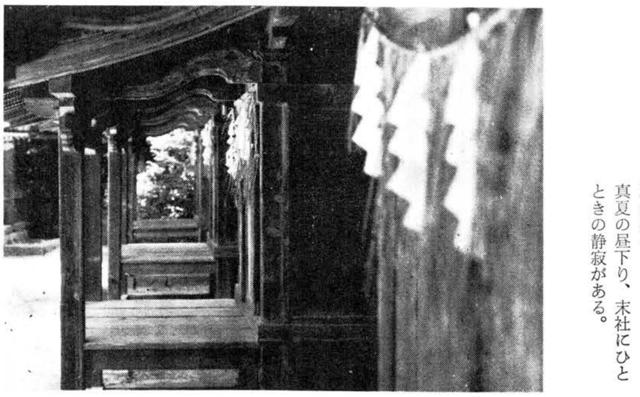
毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 133 番
定価一年送料共 500円

# 静寂

朝夕敬虔な祈りを捧げる人達は絶えない。

お末社巡りといわれる所以がある。

真夏の昼下り、末社にひとときの静寂がある。



青葉の翳に末社が整然と立ち並んでいる。

二百数十年の星霜を経て、屋根は苔むし、木肌は荒れている。

しかし、自然なたたずまいが、かえって素朴な親しみを感じさせる。

# 大復興計画募金初まる

当大社多年の宿願である勅祭社御昇格請願運動、並に境域整備拡張の御復興計画については、本紙を通じて度々お知らせした通りでありますが、其後境域拡張買収も漸次順調に進み好調な進展を示しています。

この事業に並行して募金運動が愈々開始されました。この事業計画を達成させる為には総額七億円からの費用を要し、目的額を達成するには多難の道を歩まねばなりません。宗像大社としては募金の方法を種々検討した結果、金額の多少よりも、全国の崇敬者各位から広く浄財をお寄せ頂くことに主眼を置くことにしました。

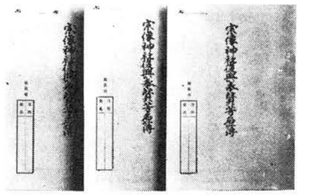
その結果、まず最初に当宗像神社復興期成会長出光佐三氏の会社である出光興産株式会社にその旨を御願いした処、この趣意を快く引受けて下さり、北は北海道から南は九州迄全国の支店、出張所などを通じて、全社員の皆様、また全国出光会の会員各位に募金の御協力をしていただくことになりました。

神社では早速四万部に上る奉賛芳名簿を発送した結果、出光興産株式会社全社員の絶大なる御協力により、次々と浄財が寄せられ、しかも各支店から奉賛芳名簿の追加申込があり、改めてこの会社の協力体制が実に美事であり、立派であることを痛感させられました。

神社では皆様のこの御協力を永遠に伝える為、この芳名簿を神社に永久に保存することにしております。また当神社の膝元である宗像郡も先般の氏子総代会に於て全郡全戸の皆様に五カ年間に亘り毎年御寄附を御願いすることになりました。

これも他郡ではみられない協力体制であり、古来より神郡宗像と称して来た美風と伝統が現在も脈々と守られている証左と云えましょう。

これから先、この目的達成の為には崇敬者各位の心からなる御協賛を得ねば完遂することは出来ません。この紙上を通じ、今後とも宜敷く御奉賛の程御願い申上げる次第であります。



## 人形祓い斎行

当社夏季大祭に際し、各位から御返送いただいた大祓い人形は、当日社前にお供えし、夏越の神事を斎行後、半年の罪、けがれを祓って玄海に流しました。

この後、皆様の御発展、無病息災、交通安全をお祈りいたしました。ここに同大祭斎行の御挨拶を申し上げます。

八月吉日

宗像社総本宮 宗像大社

崇敬者各位

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡支社 福岡市吉塚西林寺町 西林寺内
電話 ⑥⑤ 九四五六
本社 京都市下京区油小路通六条北入
電話 京都 ㉟ 六〇六六・三三四番
七三三七・九七八九番

# 宗像大社歌会新発足

去る七月二十八日（日曜日）宗像大社歌会が結成発足した。

この日は、折悪しく台風本土接近という雨模様の日和にもかかわらず、会員十五名が参集。先ず神前に於て奉告祭が斎行され、後斎館に於て歌会並に懇親会がもたれた。

従前からの歌会は名称だけで組織化されておらず、種々支障があったので、同好各位の御希望に沿って、従来の同好会を発展的に解消して新発足したものである。

歌会は終始和気藹々の中で進められ、歌道を通じて、人間性を高めたいという趣旨にそって今後の運営が協議された。

協議決定された事は次の通りである。

一、献詠歌は、従来通りとし、一般、会員を問わず神前に献詠の後、社報「宗像」に掲載する。
一、毎月第四日曜日を歌会の日とする。（但九月から）
変更のある時は前会で決め、時間は午後一時からとする。
一、歌会に提出する互選歌は毎月五日〆切りとし、織田先生に添削していただく。
一、互選歌は兼題により詠み、兼題は前会にて定める。
一、互選の方法等は暫時研究し合い定まったものにしていく。
一、献詠歌と互選歌を一緒に送付する時はわかり易く区別をはっきりさせておく事。

歌会に入会を御希望の方は、当社歌会係に申出て下さい。

## 宝物館はお休みです

只今当社宝物館は休館中である。今月六日から東京出光美術館に於て宗像大社国宝展が開催されており、去る七月十五日頃から全宝物は東京に移された為、来る十月三十日迄休館となっている。

**論説**

# 傘屋の小僧

現代は、小学校から大学まで、教育の「育」が欠けている感が深い。知識や技芸を教えてはいるが、人を育てる、人間を作る教育の眼目が失なわれているかに思える。講義の切り売りをするのが先生であり、高い授業料を払って教育労働者と自称する先生を、養っているのが学生である、との風潮が、民主教育をお題目としている学園に、教育の場とは程遠い騒動を起している。

十万人を越えるマンモス大学をはじめ、乱立した地方の駅弁大学まで合わせると、百万を超過する学生数、これが国民の教育程度を高め、文化国家のレベルを上げている数字と、そのまま受けとるわけにはゆかない。

礼状と思われる葉書を読んで、中学生かと周囲にたずねたら、大学生だと答えられて驚いたことがある。笈を負うて遊学するなどと言った頃の遊学は、遊びに出かけたのではないが、今はなんと学園に遊ぶガク生の多いことか。

学校の理事者の内輪話は、学校経営がもうかる企業とうなずかせる。色々な先生に接しても、教育者の面目を感じさせるもの稀である。教官室での会話は、報酬と税金のグチが多い。非常勤講師に至っては、企業に雇われた日傭い労務者と同じに見える。

次代の国民を作る教育の実情は、まさに現代国家の持病となっている。反抗旗を押し立てねば、学生にあらずの「平家にあらずんば」式に附和雷同する群集心理が、学園のスト・デモ騒ぎとなる。

中年を過ぎ、人生の苦労を重ねた人たちの話に、叱ってくれた先生のありがたさを思い出す謝恩の懐古をよく聞く。より正しくより有能に育てようとする教育熱心の先生の叱言は、珠玉の高貴薬となって長く処世の病苦を救ってくれる。

「叱ってくれる一人は、億万の富よりも尊い」と、ある思想家が日誌に書き残しているが、叱ってくれる人を持たない人生は、愛情を誰からも受けなかった寂しい存在に過ぎない。

教師や先輩に、技能を向上させるために、叱ってくれる指導者のあったことは、いかなる富にもまさる人生希望の光を持ち得たことであろう。きびしい愛情の鞭は、後日ありがたく偲ばれる心の糧である。

江戸の頃から、庶民が口にしてきたことわざに「傘屋の小僧」がある。いかにも江戸町人の好みに合った感じのする言葉、意味は骨折って叱られる、落語のむすびのような微笑がふくまれている。

傘を作る修業も、良い品を無駄なく作る一人前の職人になるまでには、長い苦労を積んで、度々叱られなければならない。かんな磨きから始める大工の弟子も同じ。一軒の家を自らの頭と手で造り上げる一人前になるまでは、きびしい師匠の鞭をうけねばならない。修練と叱責は何の道にもある。

労働基準法、人権尊重は結構であるが、賃銀をつながりとする雇傭関係は、技能を修得させて立派な一人前を育てる愛情の鞭を駆逐して、残るのは権利思想のみ。人間の本質を忘れた権利思想えの没頭が、当然の結果として対立抗争を生む。今やこれが持病となりつゝある。

学園騒動や、各地の集団暴挙に、扇動的態度を見せ、同情的肯定的な言動を示す一部の進歩的文化人も、現代の持病である。高校生の弁論大会のように、地に足のつかない反対理論を旗印とする革新勢力なるものも、痛ましい持病と言う外ない。

持病は直さねばならない。学園も、技術経営の場も、教育指導にあたるものは、愛情の鞭を持って人間性の向上と技能の修練に熱意を注がねばならない。

そのためには、家庭も学園も職場も、物質偏重に根ざした欧米流の権利思想を、社会構成の原理とする迷妄を、洗い去って、有害な蛇足の躍動をこそ駆除すべきである。

民主教育は、昭和元禄ムードと言われる無責任放縦の社会人を作るのではなく、風雪の修練を避けて安易なレジャー追求のみを許す教育でもない。学園も事業場も、その指導者が、人気と保身のみを気にして、勇気と自主性の喪失をさらけ出しては、もはや信念も清潔も存在しないのである。

叱る傘屋の主人、叱られる未完成の卵、それは親鳥とひなの愛情につながる姿でなければならない。

## 阿蒙少言

牛乳は飲むな。食べよと教える医者がある。その手本は赤ン坊。乳房から丹念に吸い取りつゝ唾液をまぜて呑みこみ、がぶ飲みはやらぬ。牛乳にかぎらない。何でもがぶ飲みの唾液不混は、腹のおさまりの悪いことに思い当る。赤ン坊が健康を教えている。知ることは幸福である。○胃袋を全欠して、残された生命の燈は、当人の予想を越えてなお燃え続けている。従軍記念の胃潰瘍に苦しむこと二十年、近代医学は胃袋全体を切除して食道と腸をつないだ。胃のない者に、胃癌の心配はない。胃持たないことも幸福である。○医薬品の発達と病状知識の普及は、医者でない藪医者を乱造している。処方箋をのぞいて独逸語の誤りを見つけたり、診断資料の詳しいメモを医者に差出したり。「それだけ知っている君は病院に来なくていゝヨ。」と本職があきれて匙を投げる。でも病院行脚はやめられぬ。知ることは不幸である。○文明は健康を破壊する。冷暖房の設備が皮膚を弱め内臓を害う。高貴薬が一病に効いて他病を誘う。富裕な生活は心身の不調を起し易い。そんなものがなかったら、自然の環境に順応して健康が保持されるのに。持つことも不幸である。○文明の発達は人間に不自然に生きることを教える。医学の進歩は病人をふやしている。病気を癒そうとする医者が忙しい間、病人は絶えない。病気の発生を未然に防ぐ、予防医学。病気にかゝらない健康を作る、保健医学。その最高度の発展が望まれる。○暑さもいよ〳〵本格的、日脳はじめ伝染病の発生する時節、健康は医者や薬がつくるものでない。緑の樹間を吹く清風、新鮮な野菜の料理、ありがたく感謝せよと、或る長寿の翁が折々説教する。以上そのうけ売り。

（白雲）

### 第六十六回

# 宗像大社献詠歌

毎月十五日〆切 詠草到着順

香椎 織田 椽雨
（思ふことを）
神ますをゆめな忘れぞ眼に見えぬ風に生きゆく身をかへりみて

香椎 桜井 ツ子
日ごと家をつゝむ雨音の朝宵なし吾がうつし身の水漬くとおもふ

遠賀 長畑 房江
いつしかに星の光のなくなりて暗闇になりし空のむなしさ

勝浦 永島 計七
蝶一つ迷ひ出でたり小止みせる梅雨のあい間の昼のひとゝき

田熊 鷲頭かつ代
気休めに聞かされゐると知りながら、なほそれにさへ縋らむとする

田熊 小野角次郎
神池の菖蒲はるりをちりばめて太鼓橋涼し我一人行く

田熊 小野かをる
水無月は涼し時間にあじさいの大手毬一本庭にピンクに

村山田 吉田佐市郎
水不足困り果てたる去年に増し今年も日々に続く空梅雨

千葉市 永島 哲夫
人気なき香取の宮の参道に新樹の匂ひこもらいてをり

原町 中村 幸
何気なく踏みきしなぎさ振りかえり吾が靴あとのみにくきをみつ

東郷 藤崎 辰子
母いますと思えば恋しふるさとの山を覆いて五月雨の降る

福間 瓜生阿佐江
（昨年のみあれ祭の日記より）
七浦の浪高き今日の船神幸大漁旗うなり御座船護りゆく

宮田 北原 君子
見はるかす友の牧場は緑朗へ乳牛数多バスよりみへをり

久留米 篠田太郎坊
今日も又ふるつゆさめの庭にして紅葉の若葉にそよぐ風あり

別府 土佐 トヨ
故里の追憶にふければあどけなき友等数多浮ふ瞼に

大井 村山 幸生
稲の色畦を境に濃く淡く植田広々と夏の陽に映ゆ

大井 木原ふさ子
束の間の晴れに飛び来し蝶は早雨露重き花にすがりつ

武丸 原田 松代
バスに行く松原長し人の頭黒く波間に点々と浮く

武丸 原田 リノ
せまき吾が村のあちこちブルトーザー入りきて迫るが如く響きぬ

福岡 江崎 琴子
あたらしくすだれ涼しき夏座敷つゆはるゝらし風鈴のおと

深田 中野 節子
幾日も雨降る朝をきくらげのみづみづしきを夫の取り来ぬ

武丸 立石ろせ
苞割りてピンクの花びらのぞかせし睡蓮の花水にたゞよう

戸畑 田中ハツセ
髪そめて十日余りは若く見えよりつきがたく夫の弾めり

大井 安部 重郎
昨日立ちし小鳥のひなは如何あらんさみだれ空をちっと見上ぐる

大井 安部 静子
巣籠りてひなを抱きし頬白の今日は巣立つかチチと鳴き居る

大井 吉田 和子
峡の田の畦塗りおれば老鶯の啼く音にしばし鍬を止むる

原町 八波 五月
新しく職得て通ふ朝な朝な青き稲田のこくのびて行く

福間 松尾 豊
宗像の社に集ふ歌人の姿あできを偲び臥す吾

戸畑 田中 桂一
弟と千振りを探して採りし丘赤青の家建つ新開地となる

田島 井上 託子
敷島の大和の道の祖ときこゆ青葉繁りし宗像の宮

田島 中野 洋子
青空の風に身まかす若さゆえひときわ映ゆる青葉なるかな

佐賀 都渡 耕喜
青々し木立のかげにしぐるゝや君に伝えむせみが声にも

田島 楠本 正
眉あげて明日はあの尾根越えばやと雲湧き上る岩原に立つ

田島 末安 大孝
久方に我家の庭に立ち見れば実をむすびしよかぼそきぶどうは

福間 井原 元彦
旱天のかくも続けば雨雲のこはる気配稲田気にして

## 宗像談話室

# 賞与と名鯉

名君、名将、名医などメイはいづれも、すぐれた人を意味している。名の文字は馬に及んで名馬、名犬、名花の動植物を含む中で、書画をたたえて名筆名画となるが、魚類だけはかぶされていない。古来もっぱら食膳の役割をつとめた魚は、美や芸の対象とはならなかった。せい〴〵珍味とほめられて、人間さまの胃袋におさまったのが関の山である。

ところで近頃、熱帯魚が盛んに鑑賞されているが、どんな珍品もまだ名（メイ）を頂戴していない。鯉は、熱帯地方の雑草にもひとしい魚が珍重されるのにくらべると、古くから日本の河湖に、名魚的地位を保持し、伝説の世界で節操あり勇気あるすぐれた魚とされ、溌剌たる少年の意気の象徴ともされて、五月の空を泳いでいるのに、かって名鯉の冠を拝受したことがない。名鯉があってもよい

仁徳のかけらもない凡骨が、一時はハレンチにまで流行病の如く乱授されたランジュホウショウと同様に、名士にまつり上げられる今日、美しい鯉に名鯉の名称が贈られてもよかろうと云うもの。

礼記によると、名士とは智徳のすぐれた人物を指し、これを遇するには賢者に対する礼をもってするとあるが、民主々義は点数がとび切り甘く、猫も杓子も有資格者で、東洋倫理を嘆かしている。

今を時めく民主的風潮、旧慣を吹き飛ばしてもらって、名鯉登場。美しい者は、しあわせなるかな。鑑賞の緋鯉は昇格した。凡骨やハレンチの名士にならって。

「今からあの鑑賞の緋鯉を買いに行く。前から欲しいと思っていた名鯉だ。」と強引そうな声。

時は夏季賞与の出た日の夕暮れ。賞与袋の中味をかぞえる山の神の手から、大きい聖徳太子一枚をせしめて、降りそうな空模様も物かは、マイカーは養魚場に走った。

新婚の亭主には、こんな芸は出来ない。新妻を喜ばして冷いビールのご馳走に預れば、内心はともかく、一応満悦の態。

「婦人は嫁して新しい歴史を創作する」。千古の名言でも何でもない。どこの家庭でも見られる山の神の戦術向上である。すばやく名鯉に走らねば、賞与袋が背負いきれない程の買物予定をならべ立てる名将山の神の、抜け目ない作戦計画にあやつられて、長い念願も空しく頓挫。

こうらの生えた修練の亭主はちがう。名将の智謀プラス関白の名君は、賞与作戦に名剣を揮う。

賞与作戦と言えば、夫婦間だけの戦術展開でなく、嫁とり前の息子と母親の間でも現われる。

「今度の賞与で、婚約指輪、挙式費、旅行費を予定してみると少々無理がゆくかナ」

「結納金もいるョ、披露費は大もので、賞与袋が悲鳴をあげるョ」と、母親は笑う。

「それでは一時貸して下さい」と出たが、あとで返す気もなかろうし、返して貰おうとも思わぬ。

大学を出たら、万事自立自営、親に頼るなと、おやじの平素の教訓が身にしみて、口では強いことを言っても、残念ながら新米会社員の月給や賞与が、意の如くまかなってくれない。息子は母親の結婚計画を読んでいる。わが子の幸福を願う母性の作戦負けは当然。

鯉を放って池に趣味を持つなら、上等亭主の部類である。然し、これをほめに来る夕涼みの仲間を何とする。名鯉には飲食税がかゝる。鯉をほめて縁側にみこしをすえる連中の、作戦計画もまたみごとであろう。

桃李言わざれども、下自ら蹊を成す。名鯉も言わないが、裏庭えの通行は多くなる。でも緋鯉のあらいは聞かないから、鯉料理のなぞはかけられまい。

——狸住庵茶話——

---

## 夏の恒例行事

# たなばた揮毫会

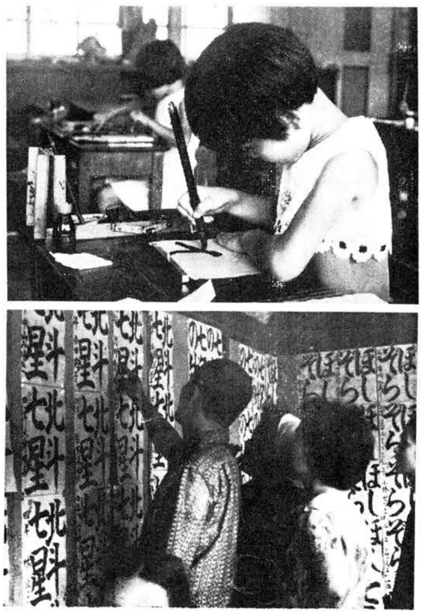
### ——献書のあとは海水浴——

第十三回中津宮七夕揮毫会は、去る七月二十一日に中学生の部、翌二十二日に小学生の部と両日に亘って中津宮鎮座地の大島で開催された。小学生参加の二十二日は朝から快晴の上天気で、揮毫会参加の子供達や付添の父兄は続々と神港の波止場に集まり、大島渡海船の大小二隻の弁天丸がピストン輸送で人々を島に運ぶ。海は、さざ波一つない全くのべた凪で、船上の子供達は夏休みに入った解放感で、どの顔もみな屈託なく明るい。三十分で大島着。会場の大島小学校では、全教室が席上揮毫会の為に準備され、先生方は休みを返上して受付、監督に当って頂いている。午前九時、第一回目の揮毫会開始、子供達は真剣な表情で筆をとる。今日に備えて、何十枚、何百枚と練習を続け、夜遅く迄頑張ってきたこれ迄の努力の成果を、この一枚にこめて、みな一生懸命である。廊下で見守る付添父兄の思いも同じ、窓外から声なき声援を吾が子に向って送っている。やがて規定の五十分が経過、終了の合図がなると重苦しかった場内の雰囲気も和やかな空気に一変する。めい〳〵書き上げた三枚の作品について、付添のお母さん達とあれこれ評議して最上の一枚を選び出す。手や顔に墨をつけた子供達も、漸く肩の荷を下ろしたという表情で、この一枚を持って元気に飛出し、足取りも軽く受付の中津宮に向う。この後学校では、第二、第三、第四回と揮毫が行なわれ、昼過ぎ迄監督の先生方は大童であった。中津宮の受付には作品を提出した子供達は、その後、海水浴を楽しんだり、磯遊びに興じたり、木陰で涼んだり思い〳〵に島の一日を過し、午后からは神社前の海岸で、恒例の「さざえ」撒きがあり、みな大はしゃぎであった。

午后二時、受付を終えた全作品を一括し、お抜いをして神前に奉奠、撤下の後、斎館で審査がはじまる。福岡書道会の三人の先生方が各学年毎に一点〳〵を厳重に審査、最後迄残った数点は、何れも甲乙をつけ難い程の優秀作品ばかりであるが、鳩首協議の結果、特選の一枚が選び出される。

二時間程で全審査を終了。銅賞以上の作品は、神門脇の廻廊に展示される。境内で結果を待ち詫びていた人々は、或いは予想以上の受賞に喜ぶ者、或いは期待も空しく賞を逸して落胆する者ありで、毎年見られる悲喜交々の社頭風景である。

午后四時より拝殿前で表彰式が行なわれる。時間の都合で、特選、準特選の受賞者にだけ賞状、賞品が授与されたが、参列者の拍手の中にこれを戴く子供の顔は、みな誇らしく晴々と輝いていた。



上　七夕と筆を走らす良い子達

下　中津宮廻廊に展示される力作の数々

### 成　績

団体優勝

| | |
|---|---|
| 小学校の部 | 東郷小学校 |
| 中学校の部 | 津屋崎中学校 |

最優秀賞

| | |
|---|---|
| 東郷小六年生 | 中山　久美 |
| 中央中三年生 | 須藤　鈴子 |

特　選

| | | |
|---|---|---|
| 小学一年 | 東郷 | えんどうまき |
| 〃二年 | 東郷 | 市川ひろし |
| 〃三年 | 河東 | 七里　美香 |
| 〃四年 | 東郷 | 今崎美佐子 |
| 〃五年 | 東郷 | 市川　和広 |
| 〃六年 | 東郷 | 中山　久美 |
| 中学一年 | 城山 | 土性美佐子 |
| 〃二年 | 津屋崎 | 塙　三枝子 |
| 〃三年 | 中央 | 須藤　鈴子 |

---

# 西鉄バス三千台記念

## 安全祈願祭を斎行

去る七月十八日夕刻、西鉄バスが当社神門前、祈願停止線に整列した。

参拝されたのは、西鉄本社バス部門関係の方々で、益々悪化する交通事情の中で安全運行を祈って玉串を捧げられた。

神門前でお抜いを受けたバスは丁度西鉄バスが運行を始めて三千台目の記念号。バス部門では日本一との事であった。

西鉄では、当社のお守りを全てのバスに奉斎しており、交通安全に徹してより乗客のサービス向上を計りますと語っておられた。

---

## 社務日誌抄

**七月一日**　勅祭請願祈願祭斎行

**四　日**　宗像大社復興計画土地譲渡委員会開催

**六　日**　中津宮七夕揮毫会予選審査会開かる。テレビ西日本宝物館撮影の為来社。

**七　日**　宗像森林都市住宅地鎮祭斎藤権祢宜奉仕。梅雨中の快晴とあって、参拝車輌多く正月と同様の賑いであった。

**一〇日**　本日より宝物館休館となる。東京出光美術館へ宝物搬出の為準備始まる。大塚巧芸社よりパンフレット「宗像神社」到着

**一三日**　玄海町役場関係者と懇親会、職員多数出席、復興計画促進について協力を願った。八幡製鉄海の家海開き。

---

# 〃宗像大社祝詞集〃成る

当社の年中祭事に使用される祝詞が今度一冊に製本されて完成し、保存されることになった。

表紙はグリーンのカバーに金文字で「宗像大社年中祭事祝詞集」となっている。

当社では、これまでに数回に亘って祝詞集が製作されているが、本格的に製本されたのはこれが初めてのことで、劃期的なものである。

内容としては、現在当社で行なわれている公式祭、並に一般の雑祭、外祭をも含めており、これらはすべて毛筆によって書き上げたものである。

B5版、リコピー複写。

公式祭の部六〇ページ、一般雑祭、外祭の部六〇ページ併せて一二〇ページとなっている。

これによって、当社で行なわれている祭りの祝詞がすべて網羅され、この一冊があればどのような祈願の申込みがあったとしても、即座にお祭りが出来るようになっている。

この祝詞に引続いて、古くからの祭儀が時代、境内施設によって変遷しているので、宗像大社祭儀史とも云うべきものを編纂する予定である。

宗像大社年中祭事祝詞集
宗像大社年中祭事祝詞集

新築完成
——玄海の味・生魚料理——
みなと荘
宗像郡玄海町神湊
電話 神湊 56番

---

# 許斐（このみ）の旗風

（其の十八）

葦浦柴舟 作
福田長庵 画

## 若葉 ㈢

心中を披瀝した克忠はどうにか落着きをとりもどした。

夕やけに立つあさの姿は美しく、克忠には女神のように感じられる。

あさはじっとうつむいたまま、みじろぎもせず、黙っているが、その瞳はうれしさに輝やいていた。

あさにしてみれば、克忠から当然このような申出があることは察してはいたものの、いさとなると娘心の恥じらいがこみあげ、返事が出来ない

しかし御互の心は無言の中にもしっかりと通じ合っていた。

いつしか、あたりはすっかり夕闇に包まれ、二人は静かに的原神社の石段を下り、家路にむかった。

天下乱麻の戦国の世、このひと時は二人にとって、二度とない青春の想い出になることであろう。変貌する世情の中で得た束の間の愛と喜びをしみ〴〵とかみしめつつ別れを告げた。

---

翌朝、克忠は定刻に城内に出仕すると早速城主康氏から呼び出しを受けた。

克忠も承知の通り、このたびの多々良川の合戦では大勝を得たが、天下の勝敗は九分通り上方で決せられるであろう。今太宰府に御逗留の尊氏殿の軍勢が東方に出発するのも近々の内に行なわれるはずだ。その折には我が許斐一族も参戦せねばなるまい。それ故、克忠の祝言も、そうゆっくりはされぬ。

今からすぐ、平井の庄屋に参るのですぐ用意を致せ。

許斐城主康氏は数名の供を連れ直ちに平井に向った。

即断即決で何事も処理する康氏は、早速克忠との縁談話しを切り出した。

庄屋にしてみれば余りにも急な相談で当惑しながらも、願ってもない縁談、すぐに話しはまとまった。庄屋は深々と頭をさげ、

「あさは不束者で御座居まするが、城主康氏殿直々の思召なれば何の異存も御座いませぬ。」と丁寧に挨拶をし、一挙に縁談は解決した。

康氏は克忠親子を呼び出し縁談がまとまった報告をすると共に、婚儀の準備にすぐとりかかるよう命じた。

めまぐるしき世相の中で行なわれる祝言は簡素なものであったが、城主康氏以下、総ての人々に心から祝福を受けて夫婦の契を結んだ二人は、幸福そのものである。

祝宴もたけなわになり、祝酒で人々が賑わいを呈した頃、新郎新婦は、そっと坐を立ち別室に向った。身仕度を変え、二人は馬に乗り出かけた。

神郡宗像の総氏神、宗像大社に結婚の報告に向ったのである。

今迄参会者の前で緊張の連続であった二人は、座をはなれたと同時に、ほっとした安心感と開放感で、二人きりになれた嬉しさがこみあげ、双方がはじめてにっこりと笑みをかわした。

ここから宗像大社迄三里の道程いつも見慣れた風景ながら、今日は目にうつるもの総てがすがすがしく美しく見える。

三里の道もいつしか過ぎ、静かな宗像大社の神域に入った。神前に進み、うやうやしく大神に結婚の報告をし、退下しようとする道すがら宗像大宮司氏範と出会った。

克忠は恥かしそうな面持で、

「大宮司殿、私は許斐城主の下臣渡辺小太郎克忠で御座います。只今神前に結婚の報告に参りました」と静かに言上した。

大宮司氏範は、にっこりと笑いながら、

「そこもとの事はよく知っておる。多々良川の合戦では御苦労であった。今日は嫁貰いか、それは目出度い。記念にこれをつかわそう……」

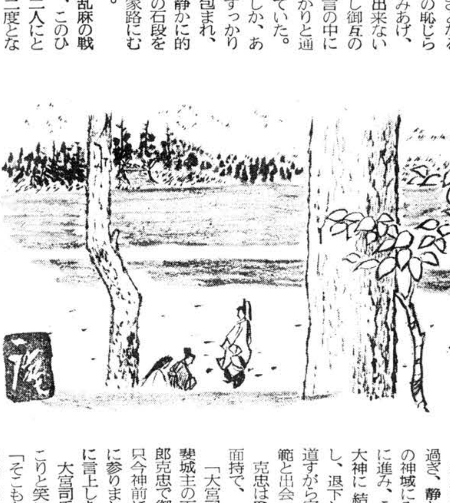
大宮司は即座にさしている脇差をとって克忠に差出した。

折角の御言葉なので克忠は有難くいただき、ふとみると鍔に楢の葉の紋がある。

大宮司直々に記念の品をいただき、しかも大事な脇差を拝領しようとは夢にも思っていなかった。克忠は有難さと感謝の余り、思わずその場に土下座した。

大宮司は克忠に脇差を手渡すと、さりげなく、その場を去って行った。

（つづく）



# 勅祭御復興事業に協力

## 郡内募金運動を推進

### ＝氏子会五ヶ年計画で＝

梅雨晴れの七月十二日月曜日、宗像大社斎館に於て全氏子会評議員会が行なわれた。評議員は各町村長、町村議会議長、及各町村（校区毎）の氏子総代より選出された人達三十余名。

氏子総会は年に春秋の大祭前に行なわれ、その間必要に応じて評議員会がもたれているが、今回は定例の会で、七月三十一日、八月一日、二日に行なわれる夏越大祭の祭典、及び神賑行事等の打合会、並びに、特に三月に行なわれた氏子総会の折り承認を得た、郡内募金の方法等細部にわたる重要案件が含まれている。

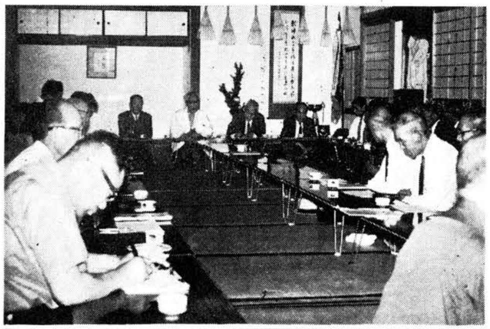
先ず中村清之氏子会副会長の開会の辞、続いて立石氏子会長、久保宮司の挨拶、勅祭請願の経過及び現況、大復興事業の概要又事業に要する浄財の募金についての計画が説明された。

議事に入り昭和四十二年度氏子会決算報告、夏越大祭の件、人形配布取纏等が審議され、それぞれ担当職員よりその内容が説明された。殊に氏子会決算については氏子会監事より監査報告等が詳細にわたって説明されたが、以上は異議なく全員承認された。

愈々この度の重要案件である御復興事業に対する募金の件について審議されたが、各校区毎の意見等、色々と長時間に亘って活発に交された。数千年来受継いで来た吾々の大切な氏神である宗像大社、又祖先が営々として礎き守って来た国の重要文化財を保護修復する事は氏子として当然の事であり、一方、宗像大社復興期成会長である出光佐三氏の会社に於て、本社は勿論各支店、出張所の社員の方々が、北は北海道、南は九州までもお社の為、募金に奔走されて居る今日、我等氏子がどうして傍観出来ようか、率先して協力体制をととのえ郡民一丸となって運動を推進せねばならぬと、誠に有難い熱意が各位より述べられ、古来より神郡宗像として伝えられて来た敬神の念と誇りとによって募金運動は集議一決した。

結果として部落の会合毎に職員は勿論宮司、氏子会役員が出席して趣旨の徹底を計り、五カ年に亘り寄附をお願いする事に決定し、満場の拍手で会は終った。

会の終了に当り、力丸義雄氏子会副会長より会議の総まとめと、今後この大復興計画を完遂するに於ては、多難の労苦がともなう事であるが、子孫に全国無比の財産を残す意義ある大事業であるので総代各位の絶大なる協力を熱望する旨閉会の挨拶が述べられた。



# 勅祭社御昇格

## 請願運動の経過　㈤

昭和十三年五月十三日
二千六百年を期し、勅祭社御加列復興計画達成祈願祭斎行。
昭和十三年五月十六日
宮司上京、勅祭社御加列復興計画促進を願う。
昭和十三年五月二十日
復興計画促進の件にて花田祢宜出張。
昭和十三年六月六日
橡本宮司他職員二名復興計画予定地実地視察を行う。
昭和十三年六月八日
国粋研究所長二本松孝蔵、宗像神社復興計画設計調査のため来社。
神社附近名寄帳、並に土地台帳により拡張予定地の実測を実施。
拡張予定地。
　田島村、牟田尻、堀ノ尻、夕尺縄手下、第三ノ下前、上殿、
二本松孝蔵に神社計画案を説明。
神社案を基礎とし製図に着手。
昭和十三年六月十日
二本松孝蔵中津宮復興計画実地調査のため、大島へ出張。
昭和十三年六月十六日
復興計画の件にて宮司県庁へ出張
昭和十三年六月二十五日
宮内省掌典星野輝興氏正式参拝。
昭和十三年七月十日
午後一時半より清明殿に於て郡内町村長会開催、復興計画促進の件につき協議会開催、復興計画促進のため奉賛会設置について、結成準備金募集に関する打合せの結果時局柄郡内にての募集困難に付如何すべきかを協議、先ず八幡製鉄より懇請する事を決定。
協議会委員
中村南郷村長、高山吉武助役、松尾赤間町長、薄河東村長、北屋敷東郷町長、倉元上西郷村長、井原福間町長、小島勝浦村長、鎌瀬田島村長、安部池野村長、刀根岬村長、梶木神湊町長、立石大島村長

# 八幡製鉄「海ノ家」

## ＝玄海荘海開き行なわれる＝

去る七月十三日、玄海灘に面した神湊の海浜に於いて、八幡製鉄玄海荘主催による海開祭が盛大に行なわれた。

折からの洋上には夏雲が立ち昇り、真夏の太陽は燦々と照りはえて絶好の海開き日和となった。

此の浜辺の松林一二、〇〇〇坪の中に八幡製鉄玄海荘が建ってから今年でちょうど七年目にあたる。

その間いろいろと潮浴の設備が整えられて、現在では九〇名収容の本館と、それに附随した休息所九棟が立ち並んでいる。その他今年から新しく七〇米角のグラウンドに百台の車が一度に収容出来るパーキング場が作られた。

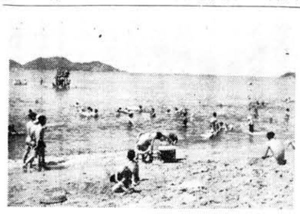
その休息所の一棟の中に緑の真榊が立てられ、〆縄が張りめぐらされた。飾り付けられた祭壇には海の幸、山の幸がお供えされ、厳粛な祭典が斎行された。

八幡製鉄本社、玄海町々長、宗像警察署長を始め、地元関係者数十名が参列し今年の海水浴の安全を祈願して敬虔な祈りを捧げた。

祭典後、主催者側の挨拶があり、玄海荘が出来て以来神事を行うこと七度を迎えた。

その間製鉄所社員、その他の利用者併せて一日平均千人以上。一夏四、五万の人達が集まって来るが、これと言って取り上げる程の大きな事故はありません。

関係者一同、神の加護と地元関係者の協力によるもので、この上ない喜びと幸せを痛感しておる旨の挨拶が述べられ、今年一夏の海水浴の無事を誓って散会した。



（写真は始まった海水浴）

# 宗像大社神宝搬出さる

## ◎愈々八月から東京で展覧

去る七月十八日、宗像神社宝物館収蔵の国宝、重要文化財、社宝等二万余点、宝物の全品が東京へ搬出された。このように全品が搬出される事は、当社にとって初めてのことである。

この搬出は、来る八月六日より行なわれる、出光興産（株）出光美術館に於ける「宗像神社国宝展」へ出品するためである。

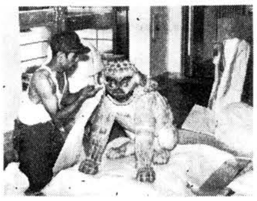
この為、全美術館から関係者が度々来社し、宝物類のリスト、現況、展示方法等にわたり、詳細に検討、沖ノ島にまで渡島されて、現地の雰囲気を会場に再現させたいと並々ならぬ熱意であった。

宝物の梱包には、日通の美術梱包部があたり、宝物は丁寧に幾重にも包まれ、大型コンテナに一括されて搬出された。

折しもこの展示会は、文化庁が新たに発足して初の催しでもあり、文化庁でも大いに力を入れている。更に八月中旬には、日本に於ける世界人類学会も開催される運びとなっており、この会に出席される各国の方々にも古代の日本人が残した立派な文化を見ていただこうとの意も含まれている。

展示会に出品されるものは、沖ノ島出土の鏡、杏葉、金指環等の国宝、重要文化財の一三七件は勿論のこと、当社所蔵の中世文書、狛犬等の重文など約二百件に及んでいる。

会期は八月六日より九月二十七日までの間、千代田区丸ノ内出光興産（株）九階の出光美術館に於いて開催される。



# 出光丸を超えるタンカー

## 〝三菱重工が建造へ〟

去る七月十九日、梅雨あけの猛暑の中を出光タンカー（株）片山勇氏、三菱重工業（株）長崎造船所斎藤秀夫氏他十二名の技術陣が宗像大社に参拝、新建造船のつつがない竣工を願い敬虔な祈りを捧げた。

新タンカーは、計画によれば二十四万トン。世界最大といわれた出光丸よりも、三万トン余り大きい。造船技術の高度な発達に伴い、現在では五十万トン級までも建造可能といわれている。タンカーの総トン数が大きい程、原油のコストが下る為、新タンカーは大きくなる傾向を見せている。

しかし、二十万トン以上になると就航々路、港湾が限定される為、ある一定のトン数がコマーシャルベースとなるだろうと関係筋ではみている。

新タンカーはこの度出光タンカー（株）から三菱重工（株）に発注されたもので、これから基本設計にかかるとの事、日章丸よりも巡航速度、旋回性能などがシビアに要求されており、これ等の要求に応える為、技術革新は一段ときびしいという話であった。竣工は四十四年の予定。

# 宗像大社献詠歌

## 兼題「海」詠草（到着順）

香椎　織田　橡雨
さゞれなす水を充たして世のために文化もたらす海のひろさよ

福間　井原　元彦
大時化のありとは見えぬ玄海の春の海原悠然として

戸畑　田中ハツセ
子と並び入学式に行く旅の山陰の海すみてあかるし

大井　村山　幸生
朝日さす天草洋のもや晴れてかゞよう波に島ぞうかべる

田熊　鷲頭かつ代
茫渺の玄海灘につらなれる渚にありてわれの小さき

深田　中野　節子
眼下覆ふ雲海清（す）みてかがよへり罪あるがごと我は空をとぶ

大島　越智　治子
朝もやに煙れる海と大空のかぎりわかたず汽笛行き交ふ

久留米　篠田太郎坊
夕陽の落ちゆくなべに黒雲の峰湧き出でて劫火と炎ゆる

朝町　井上陽之助
あゝ海だ海ようみよと子供らが波うちぎわに喜きと戯むる

原町　八波　五月
シドニーの海に散華のみ魂いだき八十路の母は帰り来ませり

田熊　小野角次郎
大しきの赤旗なびく島の舟綱手引きをり女も出でて

田熊　小野かをる
春かすむ空に大きく羽ばたきて、かもめの群れとぶ朝凪の海

名残　竹原　圓
潮騒のきこゆる如し荒磯辺に咲く浜ゆりの花をもらいて

勝浦　永島　計七
靄籠むる玄海洋のきはみなき沖行く船の行方思ほゆ

津屋崎　山口　丈夫
海の幸におもふ文化よ世界の人と握る手厚くいやひらかなん

大井　安部　重郎
遠き世の海北の道ふるさとの高麗もろこしも近き海原

宗像　栗原　つね
日をなべて暑き日射しに子供たち黒き生身を海に戯むる

勝浦　永島　文子
春雨の去りし海原霧立ちて九十九（つくも）島辺を流れゆくかも

東郷　藤崎　辰子
突き出でし宮ゐの森に連れる島二つ在りふるさとの海

村山田　吉田佐市郎
ひさにして海の辺（ほとり）に来て見れば浩き自然に心湧き立つ

津屋崎　麦野　時雄
みあれ祭海上三里三百艘氏子七浦漁船総供奉

折尾　吉岡ますみ
亡き祖父の守りし海に足入ると波に巻かれて消えゆく悩み

名島　吉田　信夫
ぶらんこに乗りて稚子等は歓呼する赤き海だよちさき海よと

福岡　江崎　琴子
空や水まなこのかぎり洋々と島かげだにも見えぬ海原

陵厳寺　真鍋　万三
潔からぬ水もあらんをそのまゝに併せて容るゝひろき海原

大井　安部　静子
磯の香にむせび下りたつ春の海に若布採りにきもすそ濡らして

福間　森　八蔵
戦艦にゼット揚げし日本海不滅の偉勲浪ぞ伝へむ

香椎　桜井　ツ子
筑海の紺青の色渺茫と夏の岬をバスに廻れば

大井　吉田　杏子
南なる奄美の海にあこがれて旅行きし子の便り届きぬ

田島　白雲　山人
海見れば海に亡せにし父をいたみ砂に伏したる守り女偲ばゆ

田島　太田　可愛
月昇り汐騒を聞く松原の木の間に望む海の色かも

田島　斎藤　惇
すみ渡る波路は遠し幾多（ここだ）なすいさりす船よ潮どきの海

田島　乙守　信平
海渡り島のひなみちすがしくも中津の宮に我はもうでし

田島　末安　大孝
狭霧こむ玄海灘はかくもがな吾も海のごとならまくほしも

田島　楠本　正
一夜餅食みつ偲ばゆそのかみの美々津の海の朝やけの色

× ×

宗像伝説　其の八十三

# 「牟田尻村高尾山異聞」

大昔は宗像神社の前まで潮が満ちて来たといわれている。

現在の神湊から湾口が小刀の先のように内陸に入れ込み、この湾に釣川が注ぎ、永年の堆積作用と海潮の関係で次第に陸地が北に形成され、現在のようになったと説明されている。

神湊と宗像神社の中間に牟田尻という部落があり、町村合併が施行される以前は牟田尻村となっていた。

扨て、これからの物語りは、年代もさだかでなく、聞きとりにくい古老のたど〱しい物語を筆録したものである。

この牟田尻村深田の乾（北西）に高尾山と名付けられた山があり、一名を高園原ともいい、里人は訛ってタカサウカ原と呼んでいたという。この山は、こんもりとした、なだらかな山で頂上は無数の岩で覆われていた。

村人は、この山を神聖視していた。それというのは古くより、この山に宗像の大神様がお降りになったといい伝えられていたからである。そして度々、不思議な事が起っていたという。

その頃村一番の正直者五平と村一番の吝嗇坊の三助とが隣り合わせに住んでいた。ある日、陽も沈み暗くなった頃、五平夫婦が野良仕事から帰って来た時、戸口から何気なく高尾山を見上げると、なんと山の頂の一点が青くにぶい光で輝いているではないか、その神秘さは身も凍り付くほどであった。

しばらく茫然としていた五平は、はっと我れに帰ると妻を呼びよせ、何か善からぬ事でも起きるのではないかと、二人で心配した。

「これは長老に話すのがようはないか」と夫婦は相談し、彼は村の長老のもとへ走った。偶然にも二人の会話を小耳にはさんだ三助は、「しめ〱、こりゃあ宝物があるに違いない」と、一人合点をして山に向った。手さぐりで山頂に登って見ると、いつの間にか光はなく、一面岩ばかりであった。舌打ちしつゝ探し歩いているうち、彼は急に足が動かなくなってしまった。大地に吸いついてしまった様なのである。焦ったがどうにもならなかった。背筋に冷汗が走り、恐怖に顔はひきつった。転げつ、はいつゝ血みどろになり乍ら山を降りた。この事はすぐに村中に伝わり、長老は神の祟りといい、中には、きっと何か宝があるのではないかと興味を持つ者もいた。

だが、そのあくる日から大雨となり、川が氾濫した。もともと低いこの村はあっと云う間に一面海のようになったという。この時は、きっと三助が何か善からぬことをしたための祟りだと云うことで、村人も日を重ねるにつれ、そのように確信するようにさえなっていった。

後日、他村の者も伝え聞き、光りの後を求めて、三々五々山頂を訪ずれたが宝物を探そうなどという魂胆の者は誰一人として五体満足に帰り得なかった。誰云うとなく、光りの一点は、神様のお降りになった神石であると、云われるようになった。

ただ、多くの岩の中にあって、どれが神石であるということは出来ず、わからぬまゝに腰掛けたり、不浄のことをした者には、奇妙な事ばかりが相継いで起ったり、それらは、その家代々にまで及んだという。その後も大凶事の前には必ず山頂の一点が輝いたので、村人もだんだんこの光が、大凶事を知らしめ給ふ大神様のお導きの光であることを悟るようになった。

それからというもの、若しこれを犯し触れば、必らず祟りがあると言い伝えられ、誰も触れる事はなかったという。

しかし、時と共にいつしかこの語り伝えも幻の如く消えさり、現在、深田部落の上にある高尾山をたずねてみてもその面影はない。

（H）

# 宗像大社献詠

## 俳句作品集（六十八）

田熊　小野淡坡
湯上りの端居に菖蒲の香を愛づる

田熊　小野かをる
夜濯ぎの白き三竿に明け初むる

津屋崎　白石百合蔵
金魚売り声より遅れて路地まがる

久留米　篠田太郎坊
赤トンボ鬼灯お盆の里赤し

平等寺　中野きみ
早乙女の呼名はやさし手は太し

大井　安部重郎
泰山木花の遅速や日々楽し

大井　吉田杏子
遠花火消えたる後の闇深し

大井　吉田和子
硯洗ふ黒筋引く雨水に

大井　木原房子
ささやかな幸せ夫と梅酒酌む

福岡　広田美津
御降りの雪と思わぬぬれ心

田島　末安大孝
大人をも子供のごとき海あそび

佐賀　都渡耕喜
夕立ちにおぐしをかばう乙女かな

田島　井上託子
雷一つ畦の合唱しばしやみ

出光佐三一問一答シリーズ ㉔

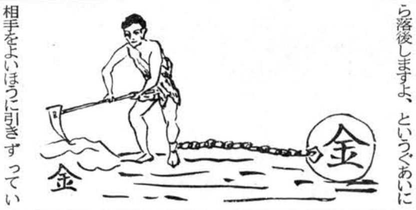
# マルクスが日本に生まれていたら

長い歴史の間には、物欲・権勢欲に迷わされた者も出て、そういう人間の矛盾性から皇室をないがしろにしたり、利用しようとしたりする者もあったけれど、これは歴史の濁りとでもいうべきものだ。本質は、皇室を中心として国民は無我・無私の姿を教わり、みんなが仲良く平和に暮らしてきたということだ。その結果、心を重んじ、物欲には関心の薄い国民性が出来上がってきたんだね。

そこに物欲を超越した清廉潔白、自己を超越した責任感が出来てきた。これが武士道である。武士は金銭に恬淡として、はなはだしきは、金銭のことを口にするのも嫌ったという気風も出来た。これは今日から見れば、行き過ぎの面があった。武士が金の大切なことも知って、金を尊重することを知っておったならば、ぼくが水島先生から教わった士魂商才ということになって、理想的な社会性をおびた実業家を生み出しただろう。そして日本の官吏、教育者が世界の垂涎の的となっていた所以も、この清廉潔白の気風と責任感の美しさをもっておったからである。これが物を超越した人間の尊い姿ではないかな。したがって日本の歴史は、人間の心を中心として動いてきたとも言えると思うね。ぼくが日本の歴史を説明するのに、国体を忘れてはならない、と言う意味もそこにある。

**質問**　そうすると、日本の歴史は、古代から現代まで、物中心ではなく、人間中心で動いてきた、と言われるわけですが、それを推し進めてきた原動力を、どのようなものと考えられますか。マルクスは、人間の社会の根本にある経済関係、すなわち生産関係と生産諸力の矛盾が歴史を動かす原動力だと言っていますが……

**出光**　「物の国」では確かにそうだろうね。物を中心として対立し、闘争することが「物の国」の歴史の原動力であろうが、しかしそれは現在は行き詰まって、人類全滅の危機に陥っていますよ、ということなんだ。ところが日本では、物は足ればよいということで、お互いに譲り、お互いに助け合って仲良くしあわせに暮らしてきている。そうすると日本の歴史は、どうして進歩するのか、という反論が出るかもしれないが、日本人は対立闘争ではなくて、自由競争するんだ。自由競争と対立闘争は異なるということについては、最初にくわしく述べたが、自由競争では、まず自分がしっかりして能率をあげ、一方では相手の立場を考えて、そんなことをしたら落後しますよ、というぐあいに相手をよいほうに引きずっていく。そこには対立闘争はなく、お互いに切磋琢磨して、平和の社会をつくっていく。それが進歩の真の姿なんだ。この意味の自由競争は、社内でも言える。出光ではお互いが励まし合って対立闘争など絶対にない。



これに対して対立闘争は、破壊に導く。この進歩と破壊の違いが自由競争と対立闘争の違いなんだ。外国ではすぐ対立闘争イコール自由競争イコール進歩というふうに考えるが、これは外国でも、自由競争が進歩の母であることは認めているんだね。しかし自由競争と対立闘争が根本的に異なる、ということを知らないから、破壊を目指す対立闘争と共存共栄の自由競争とを無理にひっつけることになるんだ。自由競争と対立闘争の違いがわかるのは日本人だけなんだ。

だからいつの世でも、人間がしっかりして、人のため、社会のため、平和・福祉のためという根本をはっきりとつかんで、どうすれば仲良く平和に暮らしていけるか、ということを考える。この仲良く平和に暮らしていこうという心構えで、そしてお互いに切磋琢磨して自由競争していくということが、日本の歴史を動かしてきた原動力である、とぼくは思うんだ。

### 19、資本主義の後に来る社会はどんな社会か

**質問**　マルクス主義は資本主義社会を一つの歴史的な発展形態と見ており、したがって封建社会が発生し、発展し崩壊していったように、遅かれ早かれ資本主義社会も崩壊していくものと見ています。つまり、資本主義社会は永久的なものではなく、やがて階級のない社会主義社会にとって代わられるものとしています。店主は資本主義社会の次の社会をどう想定されますか。

**出光**　資本主義社会がこのまままつづくか、社会主義社会になるかは、物質上の問題であって、日本にとっては第二義的なことなんだね。物質の問題を解決しても人間は幸福にならないと思うし、社会の問題についてもほんとうの解決はつかない。そこで第一義的には人間そのものの問題を解決すべきで、物質的な問題は第二義的なことなんだ。資本主義が矛盾をもっていて、その結果崩壊する、しないなどということは、物の面から見た一つの理論であり、あくまでも人間の幸福な社会は、いかにしてつくられるかということを第一義に考えるべきだろう。今のままで行って平和になる、と言える人があるだろうか。対立的な思想にもとづいて闘争して行って、はたして世界が平和になるだろうか。

（つづく）

# 健康の秘訣

出光弘

企業においても社会においても、また、家庭においても、これからという重要な地位におられる仁が、健康を害し、突然第一線から去られるのを見ると何とも残念なことであります。この一文は、私の体験と多数の実例から見て、きっと諸賢の健康に寄与すると信じます。

医学博士、農学博士、柳沢文正先生は、病気とは、酸性体質のもたらす現象の一部であるから、体質をアルカリ性にする必要があると理路整然と説いておられる。牛肉の過食によって十一年前まで病身であった私が、この説を実行したおかげで、その後は一度も病気をせず、今日満七十四才を楽しく暮しており、また、多数の友人・知人も同様の結果を得ている。人生健康である事は誰もが願うことであるが、私はこれはマイカー族と同様であると思う。勉強をして免状をとりそれで車を運転するものは自分である。運転を誤れば整備工場で修繕してもらわねば使用できぬ。

健康であるためにはどうすればよいかの知識を知り、これを実行するのは自分自身でしかない筈である。間違えばお医者様に修理してもらわねばならぬ。この簡単な理屈が案外わかっていないらしい。自分の職業に就いては、涙ぐましい努力を払い勉強もするが、健康であるための方法については、およそ無頓着であり放任する人が多い。篤学の医師でさえ若くして惜しくも死んで行かれるのを見ることがあるが、何とも割切れない気持がする。

柳沢先生は、長生して天寿を全うするには、第一、常に気持を愉快に楽しく保つこと。第二、胃腸を健全にしておくこと。第三、カルシウムの不足を補うこと。第四、疲れたらよく眠ること。第五、酸性食品とアルカリ食品を知っていて、なるべくアルカリ性側になるよう食物をとること。酸性、アルカリ性というのは、カルシウムとリンの含有量の比でわかるもので、次に私共が日常接する食品を数種並べて見る。

（下記表参照）

| | 鶏肉 | 牛肉 | 卵 | 白米食 | 精麦食 | パン |
|---|---|---|---|---|---|---|
| カルシウム | 4 | 6 | 65 | 6 | 22 | 11 |
| リン | 280 | 210 | 230 | 170 | 140 | 68 |
| | ヒジキ | ワカメ | 黒ゴマ | コンブ | 熊笹 | コンフマツ |
| カルシウム | 1400 | 1200 | 1100 | 800 | 300 | 208 |
| リン | 56 | 260 | 570 | 150 | 20 | 40 |

先生はカルシウムとリンを、一対四にとることをすすめておられる。日常の食物のとり方が間違っておれば、永い間に自分を毒殺するような理屈になるから、好きなものばかり勝手にたべていては、健康はだめになってしまう。自分の家は中風系統であるとか、ガン系統であるとかよく聞くが、親父の食事が間違っているため、家族全部が同じような食生活になり、これが原因であることが多い。然し、私共は日常の食品をいちいち計ってたべる訳にいかぬ。うまいものは表が示すように大抵酸性食品であり、また、白砂糖もそうであるから、とにかく酸性体質になり易い。そこで酸性食品をなるべく控えてとると同時に、各種の純正優良食品を補給する必要が起ってくる。以下先生が推賞しておられるものを紹介することにします。

（つづく）

＞……＜

＞……＜

文久三年　吉田主水致兼

# 〃滞京中日記〃

松崎武俊

廿日雨天、朝髪を結い後は宗像勢の所に行きて、酒などを飲み書見どもして暮らしぬ、乗平一ツ金一歩にて室町西へ入る、西村氏持参の分買い求むる、その日は甚だ面白し体多し、しかし頼まれこうがいのことに付き心配甚だ多し

廿一日、卯ノ下刻より支度いたし、上下両加茂大明神様に葵祭りに参詣す、四ツ頃御勅使御社に参詣す、その鳥居の前までは、御輿を初め何性内蔵助様讃岐山城助様を初めとして、御馬に冠石帯赤袍、袴は紫、裏は浅黄色ちちぶに似て二重なり、馬は黒馬具の錺り、中に細々は名を知らぬ虎の皮、鞍のあぶりは黒の熊の皮、その外は段々官位御役儀、それぞれの上下馬上袍冠沓色合い、かれこれ参詣して拝すべし、これを略す、御神前にて御勅使の趣き、御門の内に御入り、左右に官服上下を着し御行儀あり、向方それぐのむき座席の由委しくは存じ侍らず。

御勅使御神前御出ましの時には、和琴笛ひちりき賦吟、下加茂にてはしょう。

右の音楽にて中の御拝所に御上り、そのまま内蔵助殿より御宣紙御渡しに相成る。山城助殿坪中同ならびにて赤袍にて曲彔に御掛け、そのうしろでは三人ほどずつ御供あり、御使御神前に向かい宣面を読唱、右上表包は縹紙と見えて、白の巾細附きにて内蔵助殿馬上の時より、首にかけ懐より出すなり、宣面は緋唐紙位に見ゆる綸旨なり、眼近に差し出しうやくしき事どもなり、終って黒袍着たる神主神前より葵を献するなり、右葵も直に手にもたず白紙に包み、扇子位に見ゆれども、長さ三尺斗りあものに掛けて上げるなり、それを勅使髪に御錺りの人より付け参らすなり、つぎに赤袍に曲りたる冠の人六人出て、拝殿にて音楽にて舞いを舞うなり、そのとき勅使は御坪にて曲彔、その左に楽人六人ならび奏するなり、済まして、下に下がれば六人ともに袍の片袖ぬきて、又五度ばかりと見えて舞い済ます。二人ずつ連れて上がり、又二人ずつならびて下るなり、つぎに連銭あし毛のから馬宮廻り三べんするなり、つぎに黒馬見事の錺りにて鞍置きし馬三べん宮廻りする、馬の口取りはいずれも四人なり、それより馬場にて御馬乗りある、十二疋にて十二馬場なり、九ツ頃より上加茂に行幸になる、同御供仕る。

御神輿は金銀をちりばめ大いなることなり、車輿の棹美しくして牛の錺り蛇ばらの組もの細糸にて、綱太く長く赤にて輪をたくり持つなり、一匹の牛は御衣替えの由にて辛牛なり、もっとも錺りは相変らねども、首の輪角の縄のかけよう違うなり、上加茂八ツ半頃から九ツにかけ下加茂同様なり、馬乗りも十二馬場、それより社より裏手に山登りというて登れば、何丁ともいう所にて乗り競いあるなり、本競馬は五月節句なり、葵祭りは四月のなかの酉日なり、下加茂より上まで五十丁という、その間上中下宮狩衣上衣木綿手灑き侍の烏帽子大口など着たるは数をしらず、参詣御供両社の道終るまで続くなり、ありがたき御祭人たるに生まれ、一生に一度は参詣すべき御神なり。

### 原稿募集のお知らせ

#### 「私の宗像信仰」

この度編輯部では「私の宗像信仰」と題する原稿を募集します。私はかく信仰して日常生活を律している。私はこのように信仰して難関を切りぬけた等、色々の体験談を四百字詰原稿用紙十枚以内に纏めて「宗像」編輯部までお送り下さい。

応募原稿の方に賞を贈り「宗像」紙上に原稿を掲載します。

## 経営とは何か

ＰＦドラッカー

# 今日において将来を築く

### 将来は予測できるか

企業家のなすべき仕事としてはいろいろと考えられるが、その中でもどうしても成し遂げねばならない仕事は企業の将来を創造することである。

物理界においては、過去における数量的なものごとの解析を、将来に向かってこれを伸ばし、将来もこういう事象が起こるであろうという予測が立つのである。これは物理界においては一つの周期性というものが認められており、その周期性の原則があるために、基本的な変化というものがないという仮定に立って、そういう将来の予測ができるわけである。

こういった科学、手法、原理、原則といったようなものが、いろいろの事象の真髄をつくるために、非常に役立っているだけに、同じような方法、法則が政治、あるいは社会現象についても、また経済現象についてもあてはまるという錯覚におちいりやすい。

ところが、人間社会では、これが政治であろうと、経済であろうと、また単に人のつきあいの間にあろうと、物理界と違い、変化というものがむしろ基本的な原則であって、物理界のような周期性、不変性といったようなものと、ちようと相反している。

**将来について、ひとつだけ確実なことは、しいていえば、将来というものには必ず、おそらく起こらないだろうというようなことが起こる、ということが確実だということである。**

それについての一つの例をあげると、私が一五才ぐらいの子ども五人、その中に私の娘もいたのであるが、その子供たちを連れてニューヨーク世界博を見物に出かけた。この五人の娘は一人も数学者でもなければ、またとくに数学に興味を持っている者でもなかったのであるが、最も彼女らの興味をそそったものはＩＢＭの展示場であった。

ＩＢＭの展示場は、確かにおもしろいものであるが、しかしここに展示されている事柄は簡単ではあるけれども、けっして原始的なものではない。そして基本的なデータ・プロセッシングとか、あるいは計算とかいったようなことがわかりいいように示してある。

そこで私がＩＢＭの展示を見ながら考えたことは、ニューヨークでの世界博は二五年ぶりなのであるが、二五年前のこの博覧会見物者の中で、ＩＢＭの展示に示されているものが、想像がついた者すら余りないだろう。また実際いわれていることが理解できる人がほとんどなかったろうということである。

この五人の娘たちは、数学者や、あるいは計算機の技術者が考えるような理解のしかたはしていなかったかも知れない。しかし、少なくとも非常に印象づけられたということが認められたのである。それと同じようにアメリカの企業家の中で、自分の企業以外の世の中について、相当の知識をもっているという人たちは、余り大ぜいではないということがいえる。

**国有の企業家的活動であるところの将来を造成する、という活動は一つの分析による活動でなくて、むしろビジョンを持つことによって行なわれる。**

（つづく）